発表遺跡１

中原遺跡（なかはらいせき）

北杜市教育委員会　生山優実

１　所　在　地　北杜市高根町小池５－８～13
２　調査主体　北杜市教育委員会
３　調査期間　第１次（H 27. 9～11）
　　第２次（H 30.10～11）
　　第３次（H 30.11～12）
　　第４次（H 31. 4）
　　第５次（R 1.　5～6）
４　調査面積　1,382㎡
５　調査原因　個人住宅建築等のため
６　調査担当者　生山優実・佐野　隆・村松佳幸
　　渡邊泰彦・功刀　司
７　調査概要

遺跡は、八ヶ岳南麓中央の南北に細長く伸びる尾根上に位置します。調査区は遺跡の北側にあり、西側に緩やかに傾斜しています。

平成27年に宅地分譲に先立ち試掘調査が行われ、弥生時代を中心とする遺構・遺物が発見されました。平成27・30・31（令和元）年に個人住宅建設等に伴って５次にわたる発掘調査が行われました。

これまでの調査で、合計17基の周溝墓、土坑等が発見されました。調査された周溝墓の数としては、八ヶ岳南麓で最多になります。

◆第１～５次調査

第１次調査では、２号方形周溝墓から埋葬主体部が確認されました。８号土坑から臼玉、その周囲からは弥生時代前期の土器片が集中して出土しました。

第２次では、９号方形周溝墓の南溝から弥生時代後期の甕が完形の状態で出土しました。

第３次では、５号方形周溝墓の北西溝から弥生時代後期の甕が完形の状態で出土しました。北東隅の６号方形周溝墓は一辺が約10ｍにおよび、遺跡内で最大のものになります。

第４次で発見された13号方形周溝墓は、半分のみの調査でしたが、遺跡内でも大型のものであると考えられます。

第５次では、16号方形周溝墓の南東溝に重複する弥生時代後期の壺棺墓（30号土坑）が発見されました。口縁部が打ち欠かれた大型の壺が別個体の壺底部で蓋をされ横位に置かれていました。周溝墓との関係は不明ですが、周溝を切って土坑が造られていることから、周溝墓の造成時期も弥生時代後期以前に遡ることも考えられます。

周溝墓から時期を判断できる遺物はほとんどありませんでしたが、調査区全体の出土遺物は弥生時代後期に集中しています。よって、いずれの周溝墓も弥生時代後期に帰属すると考えられ、周溝の深さや主軸方向の違いは造成時期の差を反映している可能性があります。

◆八ヶ岳南麓における弥生遺跡

これまで数多くの発掘調査が行われてきた八ヶ岳南麓ですが、弥生時代の遺跡は少なく、この時期の様子はよくわかっていません。

周溝墓では、中原遺跡と同時期の弥生時代後期に位置づけられる周溝墓群が頭無Ａ遺跡（北杜市長坂町）で発見されています。５号周溝墓の埋葬主体部からは鉄剣１振、鉄釧１点、ガラス玉片４点が出土しています。

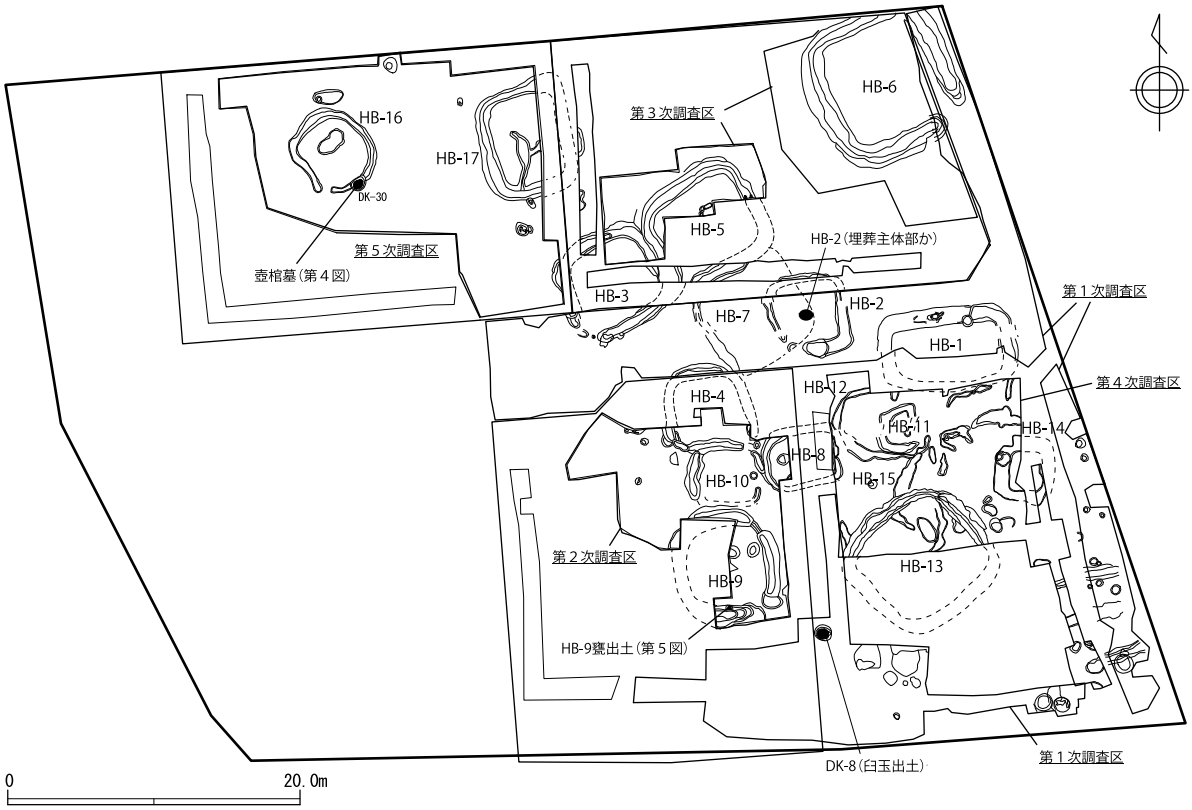
この他、中原遺跡の周辺では同じ尾根筋の西久保遺跡（高根町）で同時期の住居跡が２軒見つかっています。頭無Ａ遺跡の周辺においても住居跡が１～２軒の遺跡が数ヶ所存在しますが、周溝墓群を造営するには小さすぎるように思えます。小集落が共同して周溝墓群を造営したとも考えられますが、いずれにしても、この地域には未だ発見されていない周溝墓群やそれを造営した人々の集落が存在すると考えられます。

◆まとめ

今回の調査で、八ヶ岳南麓で２例目となる弥生時代後期の周溝墓群の存在が明らかになりました。当該期の遺跡の発見例が少ないこの地域にとって、当時の様子をうかがえる貴重な事例であるといえます。

平成６年に北村遺跡（長坂町）で初めて八ヶ岳南麓に周溝墓の存在が確認されて以降、数多くの発掘調査によって発見例は着実に増加しています。中原遺跡や頭無Ａ遺跡では、古墳時代前期の北村遺跡の事例よりも古い、弥生時代後期の周溝墓群が発見され、この時期の様子も徐々にわかりつつあります。

縄文時代の考古資料が充実する八ヶ岳南麓でありますが、今後、弥生時代の資料の発見も期待されます。



第１図　中原遺跡　調査区全体図

第２図　調査区の位置と調査範囲

第３図　16 号方形周溝墓 30 号土坑

第４図　30 号土坑（壺棺墓）

第５図　9 号方形周溝墓の甕